

清家の点本とその家学 (下)

和 島 芳 男

二、四書類附小学類

(1) 大学 四書のうち学庸についてはすべて新注に拠っていることにまず注意すべきであろう。「大学」の清家

証本としては清家文庫に宣賢自筆「大学章句」一冊(重文)があり、

永正十一年十月廿二日、以唐本終書写之功、即加朱墨訖、
(一五二四) (宣賢)

少納言清原朝臣(花押)

なる奥書と、大永四五年および天文十六年越州における宣賢の講了記とが見える。また書陵部藏業賢自筆「大学章

句」一冊の奥には、

(三条西実隆)

稟逍遙禪定内相敵命、仰息男業賢令書写、以累家秘説点進之、此篇入徳之初門也、止善之奥室也、

最可服膺而已、

從三位侍從 清原朝臣宣賢

という識語がある。しかし清家にはこれらより古く宗賢が加点して証本とし、宣賢がこれを書写した本もあった。京都大学蔵「大学章句」一冊には、

此本加一見、朱墨両点無相違、頗可謂証本矣

文龜第三卯月初十

清三位入道常益桑門隠徒判

借^二請清給事中宣賢本、令書写同点之、今日終功畢、

永正二年五月十九日

左大史小槻宿禰判

以故入道証明之点本、被遂其功訖、為後葉龜鏡而已、

給事中宣賢判

なる奥記がある。右の「常益」は宗賢の法号「常盛」の誤りなるべく、この本は宗賢加 points の証本を宣賢が写し、永正二年左大史小槻某がさらに書写したものの転写本であることが知られ、その転写の年代は天正年間と認められているが、筆者は不明である。

次に、清家の「大学」講説をうかがうべきは大東急記念文庫蔵「大学聴塵」および京都大学蔵「大学章句抄」各一冊である。「大学聴塵」は每半葉八行、本文双行、宣賢の自筆に係る也式仮名抄で、その序には四書の成立から性論の行なわれた所以に論及して孟子を推称し、かつ後世程朱が出なかつたら儒道は孟子をもって断絶しようといっている。奥には「右本環翠軒宗^(宣賢)御作分之秘抄也、不出、即御自筆也、輒勿令他見而已、正三位清原朝臣枝賢」の識語があり、次の丁には枝賢・秀賢・経賢の講了記を載せ、この本が近世寛文年間に至るまで公式の講筵に用いられたことを明示し、前記宣賢自筆本「大学章句」(重文)とあわせて、清原氏の家学史の研究のために貴重な資料を提供している。なお宣賢の講義には一条兼良の「大学童子訓」の影響が多く見られるというが、それもこの書の立証するところであろう。次に「大学章句抄」は扉に「儒門綱目」と題し、「玄雄」と署す。每半葉十一行のゾ式仮名抄で朱点があり、尾に「天文廿三年甲寅卯月廿七日書畢」なる識語が見えるが筆者は詳らかでない。恐らくこの四年前に卒去した宣賢の生前の講説の筆記を写したものであろう。その中国の經学史に言及するところは「大学聴塵」と多く趣を同じうする。ことに「大学聴塵」はむかし頼業が礼記の中から学庸を表出したことを特筆するが、「大学章句抄」もこのことをほとんど同文で掲げている。なお清家文庫本にも「大学章句抄」がある。これは也式仮名抄であるが、内容は前出ゾ式仮名抄と趣を同じうする。なお清家文庫本には山科言繼旧蔵という「四書童子訓」一冊がある。これ

も大学「大学章句抄」の系統に属するが、著者・筆者ともに不明である。

(2) 中庸 清家文庫本に「中庸」一冊(重文)があり、その奥書に、

時弘和第二^(一三八二)之候晩春下旬之天、於大和国宇智郡柴山寺行宮為末学後要染筆訖、

隠士禪恵(花押)

と見るところから南朝宋学の道統を立証するものとして重視されているが、禅恵の伝は詳らかでなく、この本が清家の架蔵に帰した由来も明らかでない。清家学史の研究のためにはこれよりもむしろ京都大学蔵宣賢自筆「中庸章句」一冊を珍重すべきである。その奥にもすべて宣賢の自筆で、

僧俗学徒、関東学士、十三经訓点清濁、悉背先儒之説、且失師家之伝、悲哉、予憐子孫赴邪路、一字不闕点之、亦清濁字声指之、為令説易、不依仮名使、一之術也、可深秘而已、

侍従三位清原朝臣(花押) 俗名宣賢法名宗尤 号環翠軒

と見え、明経の博士家が遙か関東の足利学校の学風まで考慮に入れ、自家の訓点を子孫に伝えようとした努力がいきいきと感ぜられて興味が深い。この本が每半葉七行十五字詰であるのに対し、同じく京都大学の蔵本に每半葉八行十五字詰双注の別本「中庸章句」一冊があり、奥に、

永正八年六月廿日^(一五一一)以唐本遂書写之功、同加朱墨訖、

(宣賢)

加点、以証本校合了、

少納言清原朝臣在判

とあるほか宣賢が大永年間から天文十七年にわたり、洛中や能登・越前においてこの書を講じ、枝賢も弘治二年撰津において本書の講釈を行なったことを示す講了記が右に続いている。この枝賢の筆に成る「中庸章句」一冊は清家文庫本中に見いだされ、天正元年^(一五七七)の手識がある。また京都大学蔵天文二十二年^(一五五三)写「中庸抄」一冊、清家文庫本師賢筆

「中庸私抄」一冊はともにゴ式仮名抄で、清家の「中庸」講釈の実際をうかがうべき好資料といふべきである。

(3) 論語 四書のうち中庸がもっぱら新注に拠ったのに対して論語は古注を主とし、新注をもって折衷してゐる。「論語」の正文にはまず京都大学蔵宣賢手識本一冊があり、表紙見返しには、

子孫為可惑文字読清濁、一字不闕点之、同指声者也、置字大略不読之、当読之置字点之、

とあつて行間に「清三位入道宗尤(宣賢)（花押）」と署判し、奥には、

世俗文字読、云訓点云字声、悉失師説、後葉以此点並字声可為証、為易読不依仮名使点之、為使幼童易解一術也、
侍従三位入道清原朝臣(宣賢)（花押）

と見える。従つてこの本もまたかの京都大学蔵宣賢自筆自点本「中庸章句」と同様、足利学校あたりの「世俗」に対して自家の訓読を護持しようとする意図に出たものと知られる。次に清家文庫本には良枝・枝賢の自写本がある。前者は写本二冊（重文）、第二冊の奥に、

（上略）抑此兩卷清家中興穀倉院別当正四位下行大外記清原良枝朝臣入道了空之真跡、誠子孫宝物、何不可過之乎、
天正四年林鐘二十日

天正四年林鐘二十日

清原朝臣枝賢（花押）

とあり、後者も写本二冊（重文）、外題に「円珠經」といい、第一冊の尾に、

魯論兩冊、応亡父三位之嚴命、遂書写之功、今指屈四十以往也、嗚呼歳不秘述矣、後卷雖合亡父卿証明、累葉之秘点、不漏一事、故為禁他見、章不加制筆而已、
天正四年林鐘二十日

天正四年林鐘二十日

司農清原朝臣枝賢

第二冊の奥に、

此書全部仰息男枝賢令書^レ写^レ之、以累家秘説加朱墨兩点、輒莫許電覽而已、

天文第八曆^(二五三九)仲春吉曜日給事中清原朝臣^(業賢)(花押)

という識語があり、清家における「論語」点本相伝の實際を伝えている。

この清家の「論語」講釈は王侃の「論語集解」に准拠した。東洋文庫蔵「論語集解」十冊(重文)はその巻一の本奥書に、

此書受家説事二ヶ度、雖有先君^(仲隆)奥書、本為幼学之間、字樣散々、不足為証本、仍為伝子孫、重所書写也、加之朱点墨点手加自加了、即累家秘説一事無脱、子々孫々伝^レ得^レ之者、深藏置中、勿出闔外矣、干時仁治三年八月六日、

前參川守清原^(教隆)在判

とあり、なお各巻の他の本奥書によればこの前三河守教隆が父仲隆から伝受したところに従ってみずから書写校点した仁治抄本が再三紛失、焼失したのでその都度教隆がこれを補写、繕写し、その間家説を子息直隆に伝え、直隆はまた子息教元に授け、教元の弟教宗はさらにその子息繁隆に伝授した。そして巻一の奥記の最末に、

正和四年六月七日書写了、^(三一五)

正慶二年閏二月廿一日朱墨校点了、^(三一四)

と見え、本書の伝授、伝写の次第は明らかである。宮内庁書陵部蔵「論語集解」十帖も本書と同根の伝写本で嘉暦二^(三三二)・三年禪澄の筆に係るものである。これらと別系統のものとしては大東急記念文庫蔵「論語集解」十帖、同附録二帖^(三三二)(重文)がある。その外題には「円珠経」とあり、本文には朱墨点を加え、各巻末には異筆をもって識語を下している。それらによれば本書は建武・康永の間に良枝の二男頼元および良枝の孫良兼^(法名真性)が左衛門尉飯尾三郎のために家の秘説をもって伝授したもので、その清家証本としての価値は巻十の奥に正保四年前少納言清原賢忠が特筆^(一六四七)

する通りである。¹⁰ 近来名高い「正平版論語」はこの頼元手校本を底本としたもので、その尾題の右に「堺浦道祐居士重新命工鏤梓、正平(甲辰)五月吉日謹誌」、左に「学古神德楷法目下逸人貫書」の跋がある双跋本、正平謹誌の跋のみある無跋本、まったく跋がない無跋本の三種があり、その先後については諸説があったが、川瀬博士は初刻本には右の二跋があり、単跋本はその覆刻本、無跋本はこの単跋本の跋語を削った同版後印本、双跋本はこれまた初刻本の覆刻本であると論断した。¹¹ 大東急記念文庫蔵「論語集解」十卷五冊は双跋本に属し、卷一奥に、

建武四年三月四日、以家説授申飯尾三郎金吾了、

清原頼元

という、かの頼元手校本に見えた通りの識語のほかに、

予寛正五年(甲辰)申六月十九日、於肥州厅而考正之、但左方朱点清家点也、

とあり、全巻にわたって邢昺の注疏のほかに新注も書き入れ、ことに朱子の説を参酌し、論語学における清家の折衷的態度を明示する。次に東洋文庫蔵「論語集解」十卷三冊は単跋本で各冊の奥に、

明応甲寅孟冬初三日如形加朱墨畢(花押)

長享第三曆林鐘十八日、自儲皇竹園賜之、可秘々々、

(三条西実隆)
垂相拾遺郎(花押)

此一部訪大外記師富朝臣之訓説、并見合清家之本、写朱墨之点、加随分之琢磨者也、後昆可秘々々、

明応甲寅孟冬初九手自加朱墨点畢(花押)

なる識語が見え、勝仁親王から本書を頂戴した三条西実隆が清中両家の説をもって加点了趣が明らかである。同じく東洋文庫蔵「論語集解」十卷五冊は無跋の原裝本で朱色の題簽に「魯論」と見え、卷十の尾に元龜二年二月八日宮内卿清原枝賢加点の手識がある。

これらのいわゆる「正平本論語」とともに清家の論語学伝承の實際をうかがうべきものとしてはまず東洋文庫蔵「論語集解」写本十卷五冊がある。その各巻の尾には永正九年正月・二月の間に累家の秘本をもって書写し、朱墨を加えたという少納言清原朝臣すなわち宣賢の本奥書が見え、特に卷十の奥には左の識語がある。

此書文増減字異同、多本共不同、以唐本欲決之、未求得之、專以当家古本取準的書一写之、卒終朱墨功訖、

永正九年二月九日
(五二)
少納言清原朝臣判

文字増減年來不審、以數多家本雖令校合、共以不一揆、爰唐本不慮感得之間、即校正之処、相違非一、但古本之体法今非可改易、仍脇注之両存焉、就家説於無害之文字者以朱消之、是又非憶説、黄表紙家本如此類有之、後來以此本可為証者乎、

永正十七年九月廿三日
(五三)
給事中清原宣賢

そして次に天文二十年九月大外記兼博士枝賢が本書をもって漢家本朝の「亀鏡鴻宝」と認め、累家の秘本をもって朱墨両点を加えたことを記して署判を加えている。¹²この東洋文庫本と同じく宣賢の伝本である京都大学蔵「論語集解」十卷二冊は宣賢の奥書を移写したところは東洋文庫本と一致するが枝賢の識語は一切見えず、その代りに卷十の末に清原宣条・同宣光の手識があり、本書が伏原家にも伝存したことを示している。また同じく京都大学が現蔵する谷村文庫本「論語集解」十卷五冊は元亀二年六月神亀院梵舜が宣賢の所持本を手写したものであるが、その宣賢の本奥書は前二本と文を異にし、¹³本書の清家家本が数種あったことを明示する。川瀬博士に従えばいわゆる「天文版論語」はかの「正平本論語」の双跋本の再興であり、この永正の宣賢伝本を参酌したものであるという。¹⁴いま京都大学蔵天文版「論語集解」十卷二冊についてこれを見ればその序尾に、

泉南有佳士、厥名曰阿佐井野、一日謂予云、東京魯論之板者天下宝也、雖然離丙丁厄而灰燼矣、是可忍乎、今

要得家本以重鐫梓若何、予云善、按、応神天皇御字典經始來、繼体天皇御宇五經重來、自尔以降吾朝儒家所講習之本、藏諸秘府、伝於叔世也、蓋唐本有古今之異乎、家本有損益之失乎、年代寢遠、不可獲而測、遂撰累葉的本、以付与、庶幾博雅君子糾焉、

(二年、一五三三)
天文癸巳八月乙亥

金紫光祿大夫拾遺清原朝臣宣賢法名宗尤

とあり、この書もまたかの堺の医師阿佐井野氏の開版事業の一所産であつたことを知り、あわせて当時の学界における宣賢の地位をうかがうことができる。¹⁵「天文版論語」にはこのほか広島県光藤珠夫氏所藏本と京都市妙覚寺旧藏本とがあり、前者は「金沢文庫」の偽印を有し、後者には永祿九年(一五六六)司農卿(宮内卿)枝賢加點の手識が見える。¹⁶ただ天文版は元來無注であるから、これらの諸本から直接清家の家学につき多くを知ることとはできない。しかし清家文庫本「論語義疏」殘本六冊(写本、重文、重美)のうち卷五、子罕第九、「子曰、麻冕、礼也、今也純、俟、吾從衆」の章の頭注に「八十縷、則其經二千四百縷矣、細密難成、不如用糸之省約」とまさに朱子の集注を引照し、卷八の尾の花押のかたわらに「清原良兼」の貼紙を押すところをみても、清家の論語学における新古二注折衷が良賢時代以來久しい伝統であつたことが確かめられよう。

終りにこの清家の論語学の具体的内容を伝えるものとして業忠・宣賢の講義の抄本を顧みる。まず足利氏が旧帝國圖書館藏として紹介した「論語抄」写本二冊は外題に「論語聞書」とある通り、建仁寺大昌院の天隱竜詔が筆録した業忠の講義を天文四年頼国なる者が鈔写したもので、集解本に準拠し、皇侃の義疏を主としながら朱注を多く取り入れた由である。¹⁷次に宣賢の講義の私記「論語聽塵」についても足利氏は大坂府立圖書館・京都西足院・米沢圖書館・旧圖書館・東京橋本進吉氏などの所藏する旧鈔五部をあげる。これらは也式仮名抄で、西足院本が六冊、橋本本が殘本四冊であるとはいずれも五冊から成る。またこの「聽塵」の省略本として足利氏はまた旧久原文庫藏「論語抄」以下六部を列挙する。¹⁸この旧久原本は大東急記念文庫現藏の慶長八年鈔殘本四冊がそれで、「聽塵」の仮名抄の部分

のみを鈔録したものである。¹⁹ 足利氏によればこれらに見える宣賢の講義は新古折衷ながら新注が十の六、七を占め、朱子の「集注」「精義」「語類」のほか宋元諸家の解を多く引照したが、その儒学を有為の無為、寂感の教とし、仏教を寂滅の教とし、道家の説を虚にして無為、無為の無為とするあたりは一条兼良の「大学童子訓」に見え、宣賢はこれらを相述したものであるという。²⁰ 一条家と吉田家との学問的交渉は中世思想史上のいちじるしい事実である。しからば吉田兼俱の子にして清家を継いだ宣賢の所説が一条家の学説に多く通ずるところがあるのも、あながち怪しむべきではないであろう。ちなみに京都府立図書館蔵「論語私抄」写本三冊は慶長五年以雪子宗徹の書写に係り、大部分宣賢の「論語聴塵」の仮名抄と同じく、その奥書には「此一部、於關東足利方聖智賢明匠、糺其義偏、極厥穿鑿所記、明鏡秘本也、謾莫令枉惑無道看一話之」とある。足利氏は「下毛野学校由来記」に「第九世閑室和尚、曾於学校作四書五經之口義」という記載をこの奥書に考え合わせ、足利学校庠主閑室元佑が清賢の講義に多少の訂補を加えて自己の講釈に用いたのが本書であろうと推断した。²¹ しからばこの書は清家家学史の史料としてよりもむしろ足利学校が古注を墨守したという旧説を訂正すべき史料として注目されるべきであろう。

(4) 孟子 「孟子」については京都大学に宣賢自筆本「孟子趙注」十四卷七冊、同じく自筆本「孟子抄」十四卷七冊の両者が完存しているのがすこぶる珍重に値する。まず「孟子趙注」はその第一冊の扉に「諸経通義一」と題し、首に「孟子題辭」を掲げ、首題の下に「宣賢」および「東」の印記があり、以下各巻とも每半葉七行有界、各行十四字詰双注にして朱墨点があり、毎章の終りに「章指」を示し、第七冊卷十四の末には「孟子篇叙」を附載する。これによれば清家における「孟子」の定本は「題辭」「章指」「篇叙」の三者を具備した唐初の伝本であることが認められる。しかもこの家本が良賢以来業忠・宗賢に至るまで代々相伝のものであったことは右の「篇叙」に続く奥書に、

孟子篇叙、人々本無之、仍先達等未加^二点、又不読^レ之、余至德^二三歲^二講談^二之次、以僻案加^二点、本經点多以違義理^二之^二間、又以改^二正^二之而已、

藏水軒文翁良賢

嘉吉元年八月廿五日、以曾祖父之御説授嫡男主水正兼直講宗^一賢、此本御奥書如斯、可為証本矣、

環翠軒言翁業忠

というので明らかである。そして宣賢がこの自筆本をもって永正年間まず知仁親王（後奈良天皇）に進講し、ついで享祿年間能登の畠山義総方および若狹小浜栖雲寺において講釈し、さらに天文年間越前一乗谷においても講釈したことは各巻末の識語の示す通りであり、中世末における学問の北方伝播の一斑をうかがうべきであるが、ここにさらに注目すべきはこれらの識語の中に「以摺本書^一写^二之^二加朱墨^一訖、少納言清原（花押）^{（宣賢）}」なる共通の文句があることである。これについて足利氏は清家では業忠までは歴代同じ家本を用いたらしいが宣賢のとき纂図互注本を書写して家本によって校点を加え、宣賢をはじめ家本を手写加^二点^二して養父宣賢の証明を得たが、のち唐本を自写し加^二点^二して定本としたといひ、宣賢筆「纂図互注孟子」は久原文庫（大東急記念文庫）現蔵の十四卷七冊がそれであり、宣賢筆唐本伝写本はすなわち前記京都大学現蔵「孟子趙注」であるといふ。右の大東急記念文庫蔵「纂図互注孟子」の每巻末には「文龜三^{（五〇三）}二、廿一、以家本令直点訖、一校了^{（五〇三）}」という識語があり、本文とは異筆であるが、これを宗賢の筆とは定めがたく、あるいは宣賢の手識とも思われる。それにこの纂図互注本は明らかに宋刊本の伝写本であり、その京都大学蔵宣賢筆唐本伝写本「孟子趙注」との関係についてはなお考うべき余地が少なくないようである。³

次に同じく京都大学蔵宣賢筆「孟子抄」十四卷七冊は每半葉十一行有界、本文双行で、卷三・卷九・卷十の奥書には宣賢が永正十三^{（五六一七）}、四年知仁親王に進講、その後永祿五年若狹小浜栖雲寺、天文十六年越前一乗谷において講釈した趣が見え、本文は也式仮名抄で各巻とも毎章の句首の文字を抽出し、その下にそれぞれの一章の語釈を加えている。

思うに宣賢はかの「趙注」とこの「抄」とをとものにたずさえて都鄙の講筵に臨んだのであろう。同じ講筵に用いられた本経と私記とがならび存するのはまことに稀有の例として珍重すべきである。ただ卷十四の奥に、

右侍講席卒書之分、不改言辭不飾文章抄之、私又加正義大全等、師家庭訓定雖無毫釐之差、蒙昧不敏、定可致千里之隔、後葉索隱^レ更煩、不亦宜乎、
少納言清原宣賢（花押）

とある通り、宣賢は本書の撰修に當って従来の講説のほかに宋の孫奭の撰に擬せられた「孟子正義」や明代勅撰の「四書大全」等の説を加え、大いに新古折衷の実を示したが、その所説は必ずしも「師家庭訓」に限定されず、むしろ大いに孟子に傾倒したことはすでに足利氏が指摘したところであり、最近今中寛司氏はさらに宣賢が孟子の「語録」に見えた性説などにおける排仏的態度に共感をおぼえ、「すでに早く排仏を通じての近世倫理を持っていたことに注目すべきである」と論ぜられた。²⁵ 宣賢が「關東ノ学者」すなわち足利学校の学徒の考証の誤りにつき強くこれを批判したこともここにあわせて考うべきであらう。²⁶ 清家の孟子学はわずかに右の「趙注」と「抄」との二本がこれを代表するのみであるが、その新注撰取の態度が最も積極的に、そして端的に示されている点において、儒学史に限らず、ひろく中世思想史の重要史料として一層その価値が追究されなければなるまい。なお「孟子抄」卷一および卷十四の後筆の奥書に宣賢の孫枝賢が摂津芥川において松永久秀のために本書を講じ、枝賢の孫秀賢が慶長年間洛中の自宅においてまたしばしば本書の講釈を行なった趣が見え、近世儒学史の源流をさぐるためにもよき手がかりを提供しているのである。

(5) 爾雅 小学類のここに附説すべきは清家文庫本「爾雅注疏」十一卷三冊である。各冊の首に「船橋藏書」の印記があつて清家伝本たることは明らかであり、外題は国賢の筆と認められているが筆者は詳らかでない。その字体は端正な楷書であるが朱点は第二冊のなかば過ぎで終っており、手沢のあとのいちじるしいものを見ず、別して清家の家説をうかがうべきところはないようである。

三、史部・子部・集部

(1) 史部 史部を代表するのは清家文庫本桃源瑞仙著「史記抄」写本二十冊(重要文化財)、同「漢書抄」写本六冊(同)である。「史記抄」は「史記源流」「史記事實」各一冊、「史記(本紀)抄」七冊、「吳太伯世家抄」一冊「(史記)列伝抄」十冊から成り、「源流」と「事實」とは漢文、「史記(本紀)抄」以下はゴ式仮名抄であり、筆者は宣賢・業賢父子と認められる。「漢書抄」もゴ式仮名抄で、第四冊奥に「宜竹軒景徐抄也、以彼自筆命外史業賢写之了、侍従三位清原宣賢」、第五冊奥に「以桃源自筆本仮手於他写之了、侍従三位清原宣賢」とある。宣賢がこれらの正史抄を伝写したのは清家の史学が禅家から伝受するところ多かったことを立証するが、ここにも宣賢独自の見解は認めがたいのである。

(2) 子部 まず兵家類には清家文庫本「孫子」写本一冊、同「呉子」写本一冊、「六韜秘抄」写本二冊(重要文化財)、「三略抄」写本六冊(同)、「三略秘抄」写本一冊(同)、「施氏三略講義」写本一冊(同)などがある。

「孫子」の奥には、

永祿三年十月五日、以唐本書写之、加朱墨点了在判
(一五六〇)

同 四年四月七日、以首書之本校了、
(一五六一)

というのが墨色は新しく、筆者の書写の年代も定めがたい。「呉子」の外題は枝賢の筆と認められ、「元龜三年七月十日、以或本加朱□点」なる奥書があるが内容に特異なところはないようである。これらに対し、「六韜秘抄」は也式仮名抄で注文はその意を尽し、奥に「清侍従三位清原宣賢私抄之、号環翠軒完尤(花押)」の署判が見え、「三略抄」は国賢の自筆で各冊に大てい天正十三年秋書写加点的の奥書があり、「三略秘抄」は題簽・本文ともに宣賢の自筆にか
(一五七三)

かり、卷末には次の識語がある。

天文三年四月廿六日三ヶ度講之、次抄之了、
(一五三四)

天文五年三月十一日十二日十四日三ヶ度講之、
(一五三六)

天文九・六・十一日十三日十六日三ヶ度講之、
(一五四〇)

(宣賢)
環翠軒宗尤(花押)

また「施氏三略講義」は卷三十一、三十二のみの零本であるが、卷三十一の卷初十丁は宣賢の自筆、卷三十二は尾題の下に「国賢」の印記があるところから国賢の筆かと考えられる。清家に兵家類の伝本がいろいろあり、かつたびたびこれらを講じたいらしいのは清家と武家との關係を想定せしめる好資料であろう。

次に雜家類には宮内庁書陵部藏金沢文庫本「群書治要」残本四十七卷四十七軸がある。各卷の筆跡は不同、筆者は不詳ながら毎卷の多くの識語により金沢一門の好學を推察すべき好資料である点は同じく書陵部藏金沢文庫本「春秋經伝集解」三十卷三十軸の場合と同様である。はじめ前三河守清原教隆は掃部頭北条実時の命を受け、建長五年以来(一二五三)本書に加点し、文応元年上京のついでに蓮華王院宝藏の御本と校合した。その後正元元年以来(一二五五)実時は右京大夫藤原茂範・左京大夫藤原俊国に委嘱して点校せした。文永七年茂範加点本の一部が焼失したが、幸い三善康有がかって書写した茂範の点本があったので、実時はこの康有本を借りて焼失分を繕写することができたのである。このように本書がもと清原教隆の点本であったにもかかわらず、かの「春秋經伝集解」のときのように実時が清家の訓説を受けず、むしろ藤氏儒流の点校にたようとしたのは清家が本書については特に家説というべきほどのものを持たなかったからであろうか。その卷一の奥に、

建長七年九月三日、即奉授洒掃尊聞了、抑周易者当世頗其説欲絶、爰教隆粗慣卦爻之大体、不墮訓説之相伝、為

窮鳥之質、争称雄之思哉、
(実時)

前参河守清原(花押)
(教隆)

というのも教隆が独自の見解を立てられるのは本書の一部に限られたことを暗示するように思われる。それに教隆は頼業の孫といっても清家としては庶流の人であり、ことに鎌倉に在ること二十余年、文永二年帰京してまもなく没したから清家家学史の発展にいちじるしく寄与するには及ばなかった。²⁷ また右の金沢文庫本のほかには「群書治要」の清家伝本はいまだ見いだされないようである。

類書類としては清家文庫本に「^{標題}補註蒙求」写本三冊（重要文化財）があり、本文は正楷にて毎半葉十四行毎行十四字詰、頭註は細字で、本文・頭注ともに朱墨点を加えてある。巻上の奥に左の奥書がある。

史記前後漢書已下以本書校正之同文加首書訖、

侍従三位清原宣賢

依三福寺長老裕翁發起每日講之、此卷自十月二日始、至同十八日終、^{但此内四ヶ日}

時大永四年

侍従三位清原宣賢

享祿二年於能州畠山左衛門佐義總亭講之、^{始六月廿七日終七月十八日}

右の畠山義總方における講釈のことは巻中の奥に見え、なお巻下の奥には、

享祿三年三月於能州畠山左金吾義總亭講、去年下向之時下卷不及講之上落、依結約当年亦北征終此卷、^{（宣賢）}

始十六日終二十二日
十二ヶ度

環翠軒宗尤

とあって、地方の侯伯の講筵に際し、博士家のこれに臨む態度にも大いに積極的なものが認められて興味をそそる。さらに巻中および巻下の識語によれば宣賢は天文十一年以来私宅にてもこれを講じ、^{（五十四）}同十四年夏にはまた越前一乗谷慶隆院において三十七回にわたって本書を講じたのである。本書の手沢の程度が相当なものであるのも、これほどしばしば講筵に用いられたためと了解される。清家文庫本にはなお「^{（五十五）}標題徐狀元補註蒙求」写本三冊および「^{（五十六）}標題蒙求」写本一冊があり、前者の一部は宣賢の筆に成り、後者は国賢の書写するところである。

それよりも注目すべきは同じく清家文庫本「蒙求聴塵」写本残本二冊である。その外題には「蒙求抄坤」「蒙求抄屯」、内題には「蒙求聴塵中」「蒙求聴塵下」とあり、もと三冊のうち第一冊を佚したものである。内題の下には「侍従三位清原宣賢私抄之」とあるが、宣賢の自筆ではなく本文と同筆であり、本文は也式仮名抄で毎半葉十二行、語釈を主とする。両冊とも墨色新しく手沢のあとと少ない。この清家文庫本と対比されるのは大東急記念文庫蔵「蒙求聴塵」写本三冊である。これまた也式仮名抄でその外題は上巻は「蒙求抄」、中・下巻は別筆で単に「蒙求」とあり、首には「蒙求聴塵上、侍従三位清原宣賢私抄之」と見えるが自筆ではないという。²⁸ あるいはこの大東急記念文庫本の上巻と前記清家文庫本の中・下巻とをもつて一部の完本となすべきであろうか。両者照合の機会を得ぬことを遺憾とする。いずれにせよこの「聴塵」はかの「^{標題}蒙求」にもとづく宣賢の講義の私記で、これまた清家の学風をうかがうにたるものであり、それだけに「聴塵」の宣賢自筆本の散佚が惜しまれるのである。

いま一つ注目すべきは道家類である。この類には清家文庫本「老子経抄」写本一冊、同「莊子廣斎口義」写本十冊がある。「老子経抄」は也式仮名抄で秀相所持の印記があるが、著者も筆者も明らかでない。「莊子廣斎口義」は国賢所持本で第二・第五の両冊が国賢の自筆であるほか各巻筆者を異にするが、全巻に朱墨点があるのみで、別して清家の家説というべきものを見ない。しかし禅家においてすでに虎関以来「道德経」こそ「実老子之玄言也」と尊重し、²⁹ 桃源もまたこれを踏襲し、前記の宣賢・業賢伝写の「史記抄」老子伯夷列伝においても「道德経ト云モ道德ノ二篇マテソ、宋朝ノ時分、道家ノ経カ多テ、釈氏ノ大蔵ノ様ナ六千三百余卷アルト云カ、其ホトハナウテ二千卷アルト云カ、其モ道士トモ、カク作り出テ偽テ云タ事ソ、老子ノ書ト云ハウスハ道德五千言ノ外ハアルマイソ」と述べている。また禅家における「莊子」の研究は虎関・中巖・義堂以来盛んであり、月舟寿桂も「廣斎口義」によってこの書を講じ、宣賢が知遇を得た三条西実隆も永正八年月舟の本を借覧した。³⁰ これらの事実を参酌しつつ清家学説に対する禅家の老荘学の影響を考察することは確かに興味ある研究題目であらう。

(3) 集部 この部で注目すべきは清家文庫本「胡曾詠史詩注」写本一冊および同「胡曾詩」(新板増広附音釈

文)写本一冊である。前者は宣賢の自筆で奥に「不知此注之作者、可尋^レ死之、暫^レ寫置而已、環翠軒宗左^(五)」とあり、

後者は一部宣賢筆、國賢所持本と思われ、注は宋の胡元質が加えたものである。明経の博士宣賢も毎々の講席で文雅の朝臣とまじわるからには唐詩をまったく顧みざるを得ず、それについては子孫も同様であつたろう。清家文庫には

なお秀賢筆「長恨歌伝附琵琶行」、同「長恨歌并琵琶行抄」などが見いだされ、後者には「天文十二年八月十五日

十六日於万里小路亭講之^(長恨歌、琵琶行)」なる本奥書がある。

むすび

清家の点本の諸所に伝存するものは以上のほかにも少なくない。しかしはじめに述べた通り、本稿は清家の点本のうち特に注目すべきものを類集し、それらの清家家学史上における意義を指摘することを目的とするものであり、清家点本の全部を列記しようとするものではない。またたとえば清家文庫本宣賢筆「宣賢卿字書」一冊(重文)、同業賢・國賢筆「拾芥抄」三冊(同)、大東急記念文庫蔵宣賢筆「中臣祓抄」一冊、清家文庫本宣賢著「日本書紀神代卷抄」写本一冊、大東急記念文庫蔵宣賢筆「伊勢物語抄」一冊のごとき国書も伝存する。これらは元来吉田兼俱の子である宣賢が一条家と親密であつた清原家の養子となつたという因縁により清家の家学に附加された一新生面を代表するものであり、かの一条兼良の「大学童子訓」が宣賢の「大学聴塵」において再現されたゆえんもそこに見いだされるが、これらの国書についての考察は今これを後日に譲るほかはない。

したがって今ここではかの本文三章にわたって紹介した経史子集の諸書の示すところに従い、明経家清原氏の家学について展望を試みるならば、まず目につくのは清家歴代の新注学撰取についての積極的態度である。そもそも本邦

の宋学が宋土の学者からの正統の伝承によらず、もっぱら禅僧の禅宗捧揚のためにする提唱によったことはいちじるしい事実であり、禅宗が公武の貴族に迎えられて着々として独自の地歩を占めるに至ったのは右の方便の成功を物語るものであった。このような情勢に直面した明経家が旧来の家業に安心せず、新注学に関心を持たざるを得なくなつたのは自然の成行であつた。清家においては頼業以来、鎌倉に下った教隆のときに至るまでは古注に準拠し、良賢に至って従来の家点に改正を加えたが、その際必ずしも古注を墨守しなかつたようであり、業忠が「論語」を講ずるに当って古注にもとづきながら新注を参酌したことは天隱竜沢の聞書によってこれを知ることができる。この清家の新注摂取の事実を確実に、そして直接に立証するのは宣賢自筆の諸本であり、中にも「大学聴塵」の巻首に「本注ノ大³¹学、中庸ハ礼記ニアレハ鄭玄カ注也、漢儒ハ心理ノ学ニ闇シテ義理ヲモ浅ク見、本文ノ顛倒スルヲ見ワケスシテヲキシヲ、二程子ノ見ワケテ、注ヲシテ、文ノ前後スルコトヲモヲキナホセリ」といひ、「孟子抄」に「程子曰、性善ニ³²字、孟子³³拈前聖所未発、而有功於聖門、愚亦敢曰、性即理也一句、程子³⁴拈前賢所未発、而有功於孟子」と断言するなど、むしろ新注学に傾倒する趣を見せている。

次に注意をひくのは清家の新注摂取が元来禅僧の宋学提唱に促されたにもかかわらず、その新注学が必ずしも禅家の垂流たるに終始せず、禅儒融合についても独自の見解を立て、博士家の権威を保持したことである。清家が宣賢のときにもなお禅家に聴くに熱心であつたことは宣賢がその子業賢とともに桃源瑞仙の「史記抄」「漢書抄」を写した事実からも推察できるが、この宣賢の先々代に当る業忠のときすでに天隱竜沢が業忠の「論語」講釈を傾聴し、その聞書を作つたことは前述の通りである。また宣賢の「孟子抄」に「性ヲ知り天ヲ知ルコトハ只心ヲ尽处ニアリ、故此章ニハ性ヲシリ天ヲ知ラントセンヨリモ、立帰テ心ニ本テ見ハ、自ラ性ヲ知り、天ヲ知ヘシト云也、内典ニ直指人心見性成仏ト云カ如シ、直指人心トハ尽其心ヲ云、見性トハ知其性ヲ云、成仏トハ知天ヲ云ト古人述タリ」というのは清家の禅儒融合論を大成したものであらう。³⁵ 宣賢がなお道家の学説にも関心を寄せ、その「論語聴塵」において「道

教ノ虚ハ虚ニシテ無也、儒教ノ虚ハ虚ニシテ有ナリ、周茂叔カ無極而太極也ト云ル無極ハ所謂虚也、太極ハ所謂有也、仏教ノ寂ハ寂ニシテ滅ス、儒教ノ寂ハ寂ニシテ感ス、易ニ寂然不動ト云ハ、イハユル寂也、感而道通天下ノ故ト云ハ、イハユル感也、コ、ヲ以テ二教ヲハ異端ト云リ」と儒道仏三教の別について明確な見解を示すことができたのは、³⁷宣賢の実父吉田兼俱と関白一条兼良との学問的遺産を継承したからである。この清家の家学の大成一層根本的な要因は、禪家の宋学提唱が元来宋学そのものの本質的開顕を目的とせず、ただ禪宗挙揚の方便に過ぎず、しかも禪宗の地位が確立して後はこの方便もさして必要でなくなったのに対し、清家はその明経家たる累代の家業に根ざして古注から新注への展開を正當に理解し、したがって宋学の本質的把握についても禪家を凌駕するに至ったところにあったのではないか。

私は以上の諸点につき拙著「日本宋学史の研究」の中に「清原家学と一条家学」なる一節を設けて一応論述したが、その後なお引き続き清家点本を渉猟するうち前説を修訂増補すべきところがかずかずあることに心づいた。あたかもその際「清原氏の家学とその思想的展開」と題する研究につき、かねて申請中の昭和三十七年度科学研究費交付金（各個研究）を受領したのはまことに幸いであった。よってまずここにこの小稿を草し、前説の訂補に資するとともに、これを第一着手としてさらに諸本の内容的考察を進め、前記の問題点を手がかりとして清家の家学史を組織し、なおその思想史的意義の解明をめざして研究を推進したいと考える次第である。

注

1 宣賢の叙従三位は大永元年四月、任侍従は同二年三月、三条西実隆の出家は永正十三年である。故にこの奥書は大永二年三月以後のものとするべきである。

2 長沢規矩也「大東急記念文庫貴重書解題」漢籍の部一四ページ参照。

3 頼業の学庸表出説についての批判は拙著「日本宋学史の研究」（吉川弘文館刊、昭和三十七年）四三ページ以下参照。

4 いわゆる南朝の宋学については疑を存すべきところが多い。拙著「日本宋学史の研究」一三八ページ以下、一五四ページ以下および一九〇ページ参照。

5 京都大学に寛永七年版「中庸鈔」二冊があり、その内容は師賢筆「中庸私抄」と同一である。思うに寛永版も師賢抄も同じ底本によったものであり、その底本は多分宣賢など室町時代末期の清家の博士の講義の筆録であつたろう。

6 卷二・三・十にも同じ趣の本奥書がある。

7 足利衍述「鎌倉室町時代之儒教」附録二七ページ本書を「正和鈔本」と紹介するが川瀬博士は「正平本論語攷」（「日本書誌学之研究」所収）一六四三ページにおいてこれに反対し、「正慶鈔本」と称するを良しとすと述べた。正慶二年校点のことは卷二・三・八の奥にも見える。あるいはむしろ「正慶校本」と呼ぶべきであらうか。

8 第一帖奥に「于時嘉曆第二閏九月日於加州白山八幡院玉泉坊書之、禪澄之」とあり、第二・三・八・九帖にも書写の記文があり、第九帖には「筆者禪澄（花押）」の署判が見える。足利前掲書附録同ページには本書を「嘉曆鈔本」と載せる。しかるに第四帖の奥書のみは右と趣を異にし、教隆の本奥書に続いて「弘長三年十月二十九日授申得權禪門了、前參河守清原在判」「正安四年八月十六日書之、覚源之」「延慶二年五月一日書之」「論語卷第四、曆応四年十一月日、覚源之」とあり、川瀬博士はこれによって本書が覚源から禪澄に伝わり、その後覚源に再伝して曆応年間に至つたものとする（川瀬前掲書一六四ページ）。しかし再伝ということは異常であり、なお疑を存すべきであらう。

9 たとえば卷一奥には「建武四年三月八日、以家説授申飯尾三郎金吾了、清原頼元」、卷七奥には「康永元年十月廿三日、以家秘説授申飯尾三郎金吾了、沙弥真性（花押）」とある。

10 「此論語全帙者、吾十三世之祖頼元真人為飯尾三郎金吾染紫毫、加朱墨、被教授家説、逮没後甥男良兼真人染日真性、代伯父又云相授了矣、尤為証本之最者歟、正保四年夷則十旬日、前給事中清原賢忠」。

11 川瀬前掲論文（前掲書一六二七ページ以下）。

12 なお各巻末には宣賢・枝賢の本書講釈回数を頭書しており、卷六の奥書には枝賢が本書を中原康雄に貸し、その家本の欠巻を

補写、校点せしめた趣が見える。

- 13 第五冊卷十の奥にいう、「家本雖有数部、本經之異同、置字之増減、共以不一揆、其中有琢磨之秘本、以之爲準的、假手新写之畢、予加朱墨、累葉家点也、孫々子々深秘、勿出函底矣、侍從三位清原朝臣宣^賢御判」。

- 14 川瀬前掲論文（前掲書一六八五ページ以下）。

- 15 「堺市史」卷二、四五二ページ以下（京大本の序尾の図版もある）。なお本書の版本が久しく堺の南宗寺に襲藏されたので、「南宗寺本論語」とも呼ばれたが、その襲藏の由来は詳らかでない。

- 16 光藤氏藏本はかつて「金沢文庫本図録」巻上に紹介され、「金沢文庫」の重郭墨印があるが古印でないと注せられた。この解説者関靖は後年その著「金沢文庫の研究」三六九ページにおいてこれを偽印と断じ、したがって本書を非文庫本とした。妙覚寺旧藏本は川瀬前掲論文（前掲書一六八三ページ）によれば金沢市某氏の現藏となっており、ほとんど初印本というべきものであるという。

- 17 足利前掲書八六八ページ。

- 18 同八六九ページ。

- 19 同上および「大東急記念文庫書目」四一三ページ（全十巻のうち卷七・八欠とある）。

- 20 足利前掲書八六九ページおよび四七九ページ。なお清原家字と一条家字との關係については拙著「日本宋学史の研究」一八六ページ以下参照。

- 21 足利前掲書八六九ページ。大江文城「本邦四書訓点并注解の研究」七一ページには本書は宣賢の「魯論抄」を基本として学校において討議したものであり、以雪子宗徹が足利で討議を経たものを謄写したのであるという。なお足利学校の古注墨守説については前掲拙著二六二ページ参照。

- 22 たとえば卷一の尾に「以摺本書写之加朱墨訖、少納言清原（花押）」「永正十三年十月十七日於親王御方講尺了、同廿一日、同廿七日三ヶ度申了、宣賢」「享祿三年於登州畠山左衛門佐義総亭講之」「享祿五年七月十一日、十二日、十三日、於若州小

浜栖雲寺玉首座 竹田舎弟講之「天文十五年四月於越前国一乗谷講之、三ヶ度」、卷十四の尾には「永正九年十一月九日、親王御方御文字読、以他本奉授之、今日全部令終其功給者也訖」「以摺本書加朱墨訖、少納言清原（花押）」「永正十四年十月二日於親王御方講尺申了、同十月廿一日申終者也、宣賢」「以他本三ヶ度講談了、宣賢」「天文元年八月八日、九日、於若州小浜栖雲寺竹田舎弟講了之」「天文十六年三月廿六日、廿八日、於越州一乗谷講之」などある。この「親王」は知仁親王（後奈良天皇）である。

23 「大東急記念文庫貴重書解題」漢籍の部一七ページ。なお足利前掲書五一九ページによれば大阪府立図書館に宣賢自写の纂図互注本があり、文龜三年家本を自写し、家点を加え、父の証明を得たる旨の奥記を有するというのが未見。

24 足利前掲書五二一ページにいう、公孫丑篇浩然之氣の章に「必有事」の一句を解して「或人講云、注ノ義ナラハ必有事トハ仁義ノ事ヲ云、（中略）勿助長トハ仁義ヲ行テ福ヲ助長セントスベカラズ、然レハ反テ損スル事アリ、以上説不甘心、師講云、必有事トハ仁義五常ノ事ハ人ニ具足セン、正シ長ヘキ者にアラス、（中略）勿助長トハ天然具足ノ理ハ助ケ長スヘキ者ニアラス、以上説不甘心」といい、ある人の講と師講とをあげてこれらを否定し、後段において朱子の「集注」に従って講ずるなど、朱子に傾倒せること大なるを知るべしと。ただし「以上説不甘心」は二か所とも後筆にかかる。

25 今中寛司「清原宣賢の孟子抄について」（『京都女子大学文学部紀要』第十四巻、昭和三十二年三月）。ただし同氏が「孟子趙注」「孟子抄」をともに清家文庫本とするのは誤りである。京都大学附属図書館において清家文庫として別置されるのは清原氏一門中船橋家の伝本であり、「孟子趙注」「孟子抄」などは同じく一門伏原家の伝本であり、清家文庫本には数えられない。

26 京大本第一冊「孟子題辭」の注にいう、「又言邾一又一説ニ邾国ヲ楚ヨリ取タルト云義ノアルハ非ナリ、シカト魯ノ内也、今魯国ニ鄒県ト云処カ邾ノ事也ト云、関東ノ学者カ非魯トヨム事アリ、其心ハ邾ハ楚ノタメニ并セラレタレハ魯ノ内ニハ非ト云、此説大ニ不可然」。

27 拙著「日本宋学史の研究」七一ページ以下参照。

- 28 長沢規矩也「大東急記念文庫貴重書解類」漢籍の部二一ページ。
- 29 「済北集」通衡之二。
- 30 禪家の老莊学研究については芳賀幸四郎「中世禪林の学問および文学に関する研究」（丸善株式会社、昭和三十一年）一九〇ページ以下参照。
- 31 京都大学蔵「孟子趙注」卷末篇叙奥書（前引）。
- 32 足利前掲書四六八ページおよび五一六ページ参照。
- 33 京都大学蔵宣賢自筆本「大学聽塵」（前出）大学章句序の解。
- 34 京都大学蔵宣賢自筆本「孟子抄」（前出）第三冊、卷五、滕文公章句上の解。
- 35 京都大学蔵清家文庫本「史記抄」「漢書抄」筆跡および奥書（前出）。
- 36 前掲「孟子抄」第七冊、卷十三、尽心章句上の解。
- 37 足利前掲書四七九ページ所引による。

（昭和三十八年三月二十六日稿）

A Study of the Kiyowara Family : the Chinese Classics Punctuated by them and their Method of Learning

Part II

2. The Four Books

(1) The Book of Great Learning: It is remarkable that the Kiyowara Family interpreted two of the Four Books, the Book of Great Learning and the Book of Meditation, in complete accordance with Chu-Hsi's theory. Their standard texts of the former are found in the Kyoto University Library, of which postscripts tell that one of them was copied by Norikata before 1524, and the other by his son, Narikata, on the order of Sanekata Sanjonishi. Nobukata's note on this book is kept in the Daitokyu Memorial Library. Many lectures were given by Nobukata himself, and his descendants, Hidekata and Tsunekata, according to this note, so that it must be respected as one of the best materials for the history of the Kiyowara's study.

(2) The Book of Moderation:—Nobukata's copy of this book is in the Kyoto University Library. Its postscript tells that he wanted to correct errors of the punctuation given by the Ashikaga Gakko priests. Another copy kept in the same library was made by Nobukata in 1511, and was carried with him to Noto, Echizen, and anywhere he gave lectures on this book.

(3) The Analects of Confucious:—Among the Kiyowara's interpretations of the Four books, the Analects of Confucious and the Analects of Mencius followed both of the two methods of punctuation, old and new. The best manuscript written in Nobukata's own hand is kept in the Kyoto University Library. His postscript tells that he wanted to correct errors given by the Ashikaga Gakko priests again.

Since 1242, Noritaka Kiyowara and his descendants used to give lectures on this book in accordance with Wang-Kan's methods, as it is shown in a manuscript belongs to the Oriental Library, Tokyo. But we see some new interpretation according to the

Chu-Hsi's theory was introduced into the book printed by a promoter of Sakai City in 1364, of which original text in Yorimoto's hand about 1337 is found in the Daitokyu Meorial Library. Another old text was copied by Norikata in 1520, and now in the Oriental Library. The Kyoto University Library has a book printed by a doctor of Sakai in 1533, which seems based on the Norikata's copy.

Norikata's lecture on this book was taken down by several persons. It is worth remarking that Norikata's interpretation was mostly given in Chu-Hsi's method. By the way, the Kyoto Prefectural Library has a book of 3 volumes copied in 1600, which establishes the fact the Ashikaga Gakko priests did not always keep to the old interpretation.

(4) The Analects of Mencius:—Nothing can be more highly prized than that the 7 volume text with Chao-Chi's notes, and the 7 volume transcript of lectures on the text, both of them in Nobukata's own hand, are completely collected in the Kyoto University Library. Both of them have many postscripts which testify the fact that Nobukata carried them with him to Noto, Wakasa and Echizen, where some barons were ready to attend his lectures on the Analects in the first half of the sixteenth century. Moreover we can see in these books how Nobukata was eager to introduce Chu-Hsi's method to his interpretation.

3. Historical works; general works; literary works

(1) Historical works:—this is represented by Togen's 2 volume "Notes on the Historian's Records" kept in the Kyoto University Library, which is supposed copied by Nobukata and his son, Norikata. It suggests the fact that the Kiyowara family got many things philosophical from the Zen priest like Togen.

(2) General and miscellaneous works:—Some books on strategy copied by Nobukata or Kunikata in the fifteenth century are kept in the Kyoto University Library, and show us the intimate relation between the scholars and the feudal lords. The most valuable manuscript of "Extract of Various Books" (Chünshu Chihyao) has been transferred from the Kanazawa Bunko to the Imperial

Household Library. It is consisted of 47 scrolls, each of them having many postscripts which tell how Sanetoki Hojo was eager to study under Noritaka's guidance in the middle part of the twelfth century. "Child's Request" (Mêng-Chiu) was copied by Nobukata in 1524, and was carried to the Hokuriku Districts, where he gave lectures before the feudal lords. Both of the text and the note of this book of Nobukata's own handwriting are found in the Kyoto University Library. In this library we can see some philosophical works of Lao-tze kept by Hidesuke or some of the Kiyowara Family. We will be able to see the intercourse between the Kiyowara doctors and the Zen priests who had introduced Lao-Chung's theory since the previous age.

(3) Literary works:—The Kyoto University Library has "Hu Ts'êng's Poem" and Pe Lê-tien's "Song of Eternal Grief". The former was copied by Nobukata, while the latter was recopied by Hidekata following Nobukata's manuscript. These books are produced from the Kiyowara Family's intercourse with the contemporary nobles.

Conclusion

After examinining so many books related to the development of the Kiyowara methods, we cannot fail to notice that since Naritada's period the Kiyowara Family always positively introduced Chu-Hsi's methods exceeding our expectation. Its purpose is supposed to improve their hereditary methods, confronting the Zen priests who had lectured on Neo-Confucianism since the twelfth century, to teach the Zen doctrine appealing to the court nobles' knowledge of Confucianism itself. Moreover, the Kiyowara Family excelled the Zen priests, gradually and steadily, in perfect understanding of Chu-Hsi's methods, because they based their argument on their hereditary Cofucianistic grounding that had lasted several centuries since the early Heian Period.

(The above mentioned is a part of my research work aided by the Educational Ministry's subsidy for 1962)